

1 褐斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、土壌中に残った被害茎葉や種子で越冬する。高温多湿時に発生が多く、露地栽培での発生が多い。ほ場の排水を良好にし、被害茎葉や果実は早めに除去し、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 2 密植や窒素肥料の多用は多発につながるため、適正な肥培管理を行い、発病に注意する。

B 耕種的防除法等

- 1 床土は無病土を用いる。
- 2 定植の際は苗の発病に注意し、健全苗を植付ける。
- 3 ハウス栽培では換気を行い、高温多湿にならないようにする。

2 黒枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 ハウス栽培特有の病害である。本病原菌は発生適温 25～28℃で比較的高温で多湿の場合に発生しやすい。このため、ハウスの温度管理に注意し換気も十分行うようにする。
- 2 病原菌は、病茎葉とともに土壌中に残るか、ハウス資材などに付着した状態で残り、次作の伝染源となるので、被害残さの処理を十分行う。

B 耕種的防除法等

- 1 苗床やハウスは高温多湿にならないように管理する。
- 2 初期の発病茎葉を除去する。
- 3 収穫後、被害茎葉を処分し、伝染源を残さないようにする。

3 うどんこ病

A 生態と防除のねらい

- 1 ハウス栽培で多く、28℃前後の高温と50～80%程度の比較的低い湿度で発病が多いが、通風採光が悪いと発病を助長するので、過繁茂にならないよう適正な管理を行う。
- 2 ハウス栽培では年間を通じて発生するが、特に5～6月頃多い。露地栽培では、梅雨期以後に発生し始め、夏から秋にかけて多発する。多発してからの防除は困難なので、発病初期に防除を徹底する。



B 耕種的防除法等

- 1 密植を避け、通風採光を良くする。
- 2 不要な下葉はできるだけ除去する。

4 すすかび病

A 生態と防除のねらい

- 1 ハウス栽培で発生し、露地栽培では極めて少ない。病原菌の発育適温は25℃前後で、多湿の場合に発病しやすい。このためハウス栽培では排水、換気などに留意し、ハウス内の湿度を下げるようにする。
- 2 病原菌は被害植物体について生存し、次作の伝染源になるので、発生ほ場では収穫終了後被害茎葉の処分を行う。
- 3 感染から発病までの期間が長く、発生をみた後では防除が困難なので、薬剤防除は予防に重点を置く。

B 耕種的防除法等

- 1 排水を図り、密植を避け、ハウスの換気を十分に行って湿度の低下を図る。
- 2 かん水は過多にならないようにする。
- 3 初期の発病葉は早めに除去する。
- 4 発生ほ場では収穫終了後被害残さを処分する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

薬剤耐性菌発生の恐れがあるので、同一系統の連用を避け、ローテーション散布を行う。

5 灰色かび病

A 生態と防除のねらい

- 1 発病適温は20℃前後で比較的低温であるが、本病の発生には温度よりも湿度の影響の方が大きい。
- 2 多湿状態が続くと多発するのでハウス内の多湿を防ぐため換気を行う。
- 3 低温時で換気のできない場合は、暖房により湿度の低下を図る。



B 耕種的防除法等

- 1 排水を良くし、換気に努めハウス内が多湿になるのを防ぐ。
- 2 不要な花卉は早めに除去する。
- 3 発病果、発病葉はハウス外に持ち出し、処分する。
- 4 多重被覆栽培では、施設内の日射量が少なくなり、多湿となり多発生しやすいので注意する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 薬剤耐性菌発生の恐れがあるので、同一系統の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

6 菌核病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、菌核の形で土壌中に残り、春秋期に発芽して子のう盤を形成し、子のう胞子を飛散して伝染する。
- 2 気温が20℃前後で多湿の場合に発生が多いので、ハウス栽培では過湿防止を図り、発病初期のうちに防除を徹底する。



B 耕種的防除法等

- 1 夏期にハウス密閉による太陽熱消毒を行う。
- 2 排水を良くして多湿になるのを防ぐ。
- 3 施設内全面にプラスチックフィルムによるマルチを行い、子のう胞子の飛散を防ぐ。
- 4 発病は場では菌核を残さないように残さを処理する。

7 綿疫病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は卵胞子の形で病果実などとともに土壌中に残り伝染源となる。雨滴などにより地表面から病原菌が飛散し発病するので、プラスチックフィルム等によるマルチを行い、土のはね上りを防ぐ。
- 2 高温（28℃）、多湿の場合に発生が多いので、ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。密植、窒素過多も多発の原因となるので注意する。
- 3 長ナス系統は弱く、丸ナス系統は強い傾向がある。

B 耕種的防除法等

- 1 発病地では連作を避ける。
- 2 密植や窒素質肥料の多用は避ける。
- 3 ほ場の排水を良くし多湿になるのを防ぐ。
- 4 プラスチックフィルム等によるマルチを行い土のはね上がりを防ぐ。
- 5 被害果は早急に処分する。

8 苗立枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌はリゾクトニア属菌とピシウム属菌による場合が多い。いずれも土壤中で長く生存し、土壤伝染する。また、多犯性で多くの作物に感染し、幼苗期に発病する。
- 2 多湿土壤で発病しやすく、軟弱徒長の苗では多発しやすいので、かん水過多にならないようにするとともに栽培管理に注意し、健全苗の育成に努める。

B 耕種的防除法等

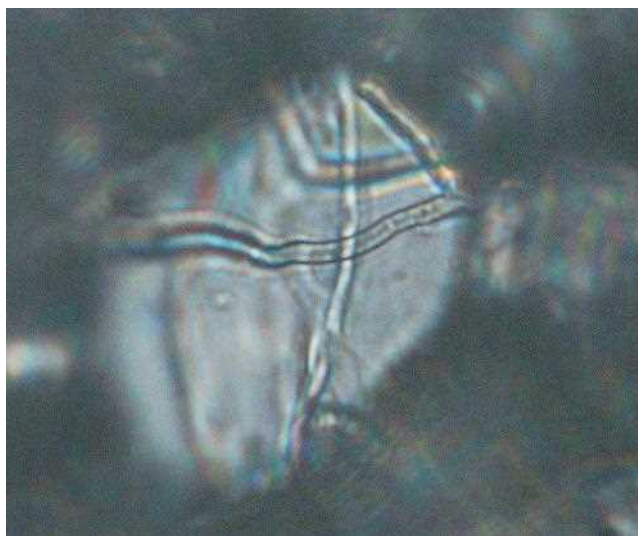
- 1 床土は無病土を用いる。
- 2 完熟たい肥を用いる。
- 3 かん水は適正に行い、多湿を避ける。
- 4 軟弱徒長にならないように適正な管理を行う。

9 半身萎凋病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、枯死病葉上に形成された菌核が土壤中に残り主な第一次伝染源になると推定されるので、被害茎葉はほ場に残さないように処分する。
- 2 本病は発病適地温が20～24℃で高温期には病勢が停滞する。このため、促成、半促成など前進型の栽培では多発しやすい。多湿土壤では被害が著しいので、ほ場の排水を良くする。
- 3 耐病性のある台木に接ぎ木するが、完全ではないので総合防除の一手段として利用する。

導管内の菌糸



パーティシリウムダーリエの分生子柄と分生子



B 耕種的防除法等

- 1 床土は無病土を用いる。
- 2 ほ場の排水を良好にして土壤の水分過多を避ける。
- 3 発病株は抜き取り処分し、収穫後はほ場衛生に努める。
- 4 枯死病葉上に形成された菌核が第一次伝染源となるため、夏期高温時に2ヶ月以上の湛水するか、または太陽熱消毒を行う。
- 5 耐病性台木による接ぎ木栽培を行う。

10 白絹病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は菌核あるいは被害植物体中の菌糸で土壤中に残り伝染源となる。非常に多犯性で200種以上の植物を侵す。
- 2 酸性土壌で発生しやすい。
- 3 発病後の防除は困難なので、水稻との輪作や被害植物を処分し、病原菌の密度を高めないようにする。夏期の湛水処理は、菌核を死滅させる。

B 耕種的防除法等

- 1 床土は無病土を用いる。
- 2 発病の多いほ場では4～5年水稻を栽培する。
- 3 夏期に、ハウス密閉による太陽熱土壌消毒を行う。
- 4 酸性土壌で発生しやすいので、適正な土壌pHで栽培する。
- 5 被害株は発見次第周囲の土とともに取り除く。

11 青枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は土壌伝染し、ナスの他トマト、ピーマン、タバコ、イチゴなどの多数の作物を侵すので、ナスを初めて栽培するほ場についても注意が必要である。
- 2 発生は地温が20℃を越えるころから始まり、夏期の高温時に発生が多い。また、土壌が多湿の場合に発生が多いので、ほ場の排水を良くする。
- 3 耐病性台木を用いた接ぎ木栽培は有効であるが、耐病性台木を侵す菌群があるので、台木の選定には注意する。
- 4 植え傷みや線虫の加害、乾湿の差が激しいかん水法等による根傷みは感染を助長するので注意する。

B 耕種的防除法等

- 1 耐病性台木に接ぎ木する。
- 2 床土は無病土を用いる。
- 3 夏期高温時に太陽熱土壌消毒を行い、病原菌密度を下げる。
- 4 定植時にできるだけ根を傷めないようにする。
- 5 夏期の栽培では地温の上昇を防ぐため敷わらなどをする。
- 6 ほ場の排水を良好にする。

12 ウイルス病

A 生態と防除のねらい

- 1 モザイク病は、主にキュウリモザイクウイルス（CMV）によって発生する。汁液とアブラムシによって伝搬され、土壌伝染や種子伝染はしない。
- 2 えそ斑点病は、ソラマメウイルトウイルス（BBWV）によって発生する。アブラムシによって伝搬され、土壌伝染、種子伝染はしない。

B 耕種的防除法等

- 1 育苗期は、防虫ネットで被覆する。本ぼの開口部も防虫ネットを設置する。
- 2 本ぼでは、プラスチックシルバーフィルム等によるマルチまたは、シルバーテープの利用により有翅アブラムシの飛来防止に努める。
- 3 発病株は早期に抜き取る。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

媒介虫の防除（ナス科虫害の項を参照）

CMV、BBWVに対してはアブラムシ類の防除を行う。